

オランダ商館医とポンペ



* 荒瀬家文書（防府市）135「ポンペ肖像」

解説

江戸時代、長崎出島のオランダ商館には医師が駐在し、限定的ながら日本人患者の診断を行ったり、日本人医師との医学的交流を行ったりしていました。いわゆる出島の三学者（ケンペル、ツェンベリー、シーボルト）や日本に種痘をもたらしたモーニッケなどが有名で、オランダ語の医学書とともに、日本の医学に大きな影響を与えました。

開国後の1857（安政4）年、幕府は長崎海軍伝習所の医学教師としてヨハネス・ポンペ・ファン・メーデルフォールトを招聘し、これ以降、日本でも自然科学を土台にする体系的な近代医学教育が行われました。身分や貧富の隔てなく治療を行った彼のもとで、維新後に初代陸軍軍医総監となった松本良順（順）をはじめ、近代西洋医学の定着に大きな役割を果たした面々が育ちました。

山口県三田尻（現防府市）の荒瀬幾造（収甫）も長崎でポンペに学んだ一人で、帰郷後荒瀬家ではポンペを神としてまつりました。写真は、その祭事の際に床の間に架けられたポンペの肖像です。

* 当館には、シーボルトの鳴滝塾で最初の塾長となった岡研介の関係資料が数点あります。吉田樟堂文庫106「岡研介子事蹟志料」、同1301「常用方」など。同195『蘭説養生録』は鳴滝塾同門の高野長英との共訳（当館のものは刊本からの筆写）です。